

二〇一五年六月一六日(参加者一七名)

根上りのよき手摺なす登山道	うつぎ
滝音の間遠となりて鳥語聞く	うつぎ
急流もなにするものぞあめんぼう	うつぎ
茶屋涼し瀬音に和して鳥語降る	うつぎ
燭一つ不動尊へと梅雨の間	うつぎ
滝道に沿ひてせせらぎ呂に律に	菜々
滝しぶき白銀となる岩襖	菜々
梅雨じめりして護摩堂の注連古りし	菜々
滝茶屋の昼を灯してなほ暗し	菜々
滝しぶき羊歯群落の揺れやまず	はく子
男滝あり女滝は木の間がくれかな	はく子
赤銅の岩をさ走る滝白し	はく子
懸崖をのりだし仰ぐ滝頭	せいじ
左折れ右折しては滝落つる	せいじ
緑苔をまとひし樹々や滝の道	せいじ
白布うち広げしごとく滝落つる	ひかり
滝しぶくま近に句帳開きけり	ひかり
立ち仰ぐ樹間の奥に女滝あり	ぼんこ

滴りの岩に目をむく不動尊	ぼんこ
古しまま開かずの祠徽にほふ	明日香
木隠れにくの字に落つる女滝かな	明日香
大木の根方を埋む濃紫陽花	つくし
梅雨の滝古き祠にしぶきけり	宏虎
梅花藻の流れに添ひて水涼し	よし子
六甲へ矢印の立つ滝の道	こすもす
瀬の風に定家葛の匂ひけり	有香
良寛の臨書に挑む夏座敷	かかし
滝音に佇てばストレス消えにけり	満天

定例句会みの選

二〇一五年六月一六日(参加者一七名)